

土壌化した非常な差があり、従って、花崗岩礫の地域では、農業的土地利用がされにくいのではないかと考えられる。この点については、他の多くの扇状地例から確証をつかみたい。

以上、土地利用についての各扇状地の特長の次に、各扇状地面の特長をみると、扇状地Ⅰ面は、ほぼ畑地区である、ということがいえ、これは最高位面であるために水が得にくいこと、最も急傾斜である、という地形的制約によることの外、未調査であるが、ここは戦後の開拓のため、水利権が少ないのではないかと、ということもつけ加えて考えられないだろうか。

以上が、この地域の調査の目的とする点についてであるが、最後に、現在この地域付近が、諏訪～松本～大町の新産業都市の指定区域に定められ、このことと関連して現在は、純農村といってよい、この地域が、徐々に、近郊農村的な色彩を強めていきつつあり、将来も工業地域にはならず、あくまでも、農村地域であろう、ということが考えられる。

以上、この地域の調査主眼について要約した。卒論から導かれた最も大きな問題点として、花崗岩と古生層の礫と土地利用状態との関係という点が提起されたので、今後、この点から調査を開始したい。

## ニュージーランドの地誌“人口問題を中心として”

前波敬子

ニュージーランドは、英連邦中最も小さく、最も遠距離にあり、その位置は南太平洋上南緯34°から48°の間にある、南島、北島、スチュワート島より成り、全般的に山地が多く、面積の約4分の3は標高185m以上の高地である。河川も多いが大部分は急流で短かく経済的価値が乏しい。気候は主として海流の影響をうけて温暖で寒暑の差は少なく、さわめて健康的である。雨量も十分にかなり年平均しているため、日照時間が長いことと共に牧草の成長に良く、農牧畜業に最適である。

このように、ニュージーランドは地形的にも、気候的にも牧畜業に最適である。総輸出額の85%以上は羊毛、食肉、バター、チーズなどによって占められ、工業はほとんどがそれらの加工であるように、ニュージーランドの経済の基礎は牧畜業にあるが、農村に居住する人口は全人口の38%にすぎない。1957年度の人口増加は2.1%で、これはヨーロッパのいずれの国よりも高い増加率である。国民の年齢構成からみて今後10年間に老令者の割

合が低下する半面、就業年齢層の割合が増加することになる。この国の人口は1908年には100万であったのが1953年には200万と倍増したが、この人口増加率のままでは、今後20年経たないうちに人口は300万人に達するものと考えられる。現在の生活水準の維持と完全雇用の観点からみて、この国の人口増加は将来大きな問題になると思われるので、ここでは特に人口とそれに関連して起る問題について、調べてみた。

ニュージーランドの人口は、年々2%以上増加しており、1957年には300万人に達するといわれるが、現在の生活水準を引き下げないでこの増加人口を養うためには、第一次産業および第二次産業の生産をどの程度引き上げ増加する労働力をどこで吸収するかが問題になる。これを第一次産業についてみると、1975年における300万の人口に対して現在の生活水準を維持するためには、バターおよび、食肉をそれぞれ60%、羊毛を70%増加しなければならないが、その目標を実現するためには1950年における生産水準の2%を年々増加しなければならないことになるが、これは非常に困難である。また労働人口の増加は農業において吸収する余地はなく、結局第二次産業で吸収する他ないが、第二次産業の拡大は必然的に原材料・設備などの輸入の激増となってこの国の外貨事情を悪化させることになり、他面市場が狭隘なことから賃金コストの高いために、この国の工業を海外の工業製品の競争から守るためには、政府の統制による輸入制限、関税障壁による方法しか残されていない。

## 日野市の地理学的考察

松橋葉子

### 第一章 地域概説

#### 第一節 自然環境

日野市は東京の西南部にあたる。ここで多摩川とその支流の浅川が合流している。地形は丘陵・台地・段丘・沖積地に分類され、そのうち丘陵・台地・段丘の上位2段は一次ロームにおおわれている。

気候はだいたい表日本式気候と同じ *type* であるが、都心と較べると、やや内陸的傾向が気温の上でみられ、また山地に近づくため、雨量も多くなっている。

#### 第二節 人文環境

ここでは後述の都市化の章で扱った以外のことをとり上げた。日野は江戸時代、甲州街道の一宿駅であった。明治以後の鉄道の開通、昭和初期の工場